

# 「のだ」の文・「わけだ」の文 に関する一考察

松岡 弘

## 1 はじめに

本稿では、「のだ」の文・「わけだ」の文について、その構造と意味内容を日本語教育への応用面を重視しつつ考察する。ここでいう「のだ」の文・「わけだ」の文というのは、従来の国語学の用語に従えば、準体助詞「の」、あるいは形式名詞「わけ」に指定の助動詞「だ」「です」（あるいは「である」「であります」）の下接した形式を指す。また、「のだ」「のです」の変化した形、「んだ」「んです」もこれに含まれるものとする。

さて、本稿では「のだ」の文・「わけだ」の文を、きわめて類似した構造と意味をもつ形式として、両者を関連させて論じたいと考える。その根拠の一つは、例えば次の講演記録にみられるごとく、「のだ」と「わけだ」は同一の文脈の中に頻繁に出現し、しかもそのかなりの部分が相互に言い換えが可能だという事実があるからである。

……当時の鉄はなんで造ったかと申しますと、鉄鉱石を木炭で熔融して、木炭で還元して造ったわけですね。今日ではご承知のとおり、コークス、つまり、石炭によって熔融還元して鉄を得るのでありますが、産業革命直前の時期では木炭によつた。木炭はなんで得られるかというと無論木材です。森林なのであります。ですから、昔の鉄鋼工場は山の中に造られたわけですね。森林と鉱石のあるそばに造られた。まずイギリスがこの製鉄業を非常に盛んにしたのでありますが、そのために山の木は次々と伐られていくわけですね。イギリス中がまさに裸の山になったわけです<sup>(1)</sup>。(下線筆者)

上の例文に即して「のだ」と「わけだ」の意味の違いを問うとすれば、前者が話し手の一方的な断定の感じが強いのに対して、後者の方は聞き手を意識した相互了解的

な断定ということになる。いずれにしても、両者の使い分けは、話し手の微妙な心理に左右されるもので、相互に入れ換えてもそれほど不自然にならないケースが多い。以上の点からも、「のだ」と「わけだ」は、お互いに用法的にも関連しているのだが、本稿ではまず「わけだ」の意味と構造を考察し、つづいて、「のだ」の文を検討し、最後に、両者の関連性を論じたい。

## 2 「わけだ」の文

2-1 「わけだ」を正しく用いることは、外国人学生にとってかなり難しいことである。「わけだ」にまつわる日本語の誤用例（実際に留学生が作文に書いたもの）を以下に示す。

- a. けれども、それは完全に科学のせいではない。それは政治家が科学を利用するわけである。(シンガポールからの学生の作文より採集したもの)
- b. 義務教育は、大都市では小学校までになっていますが、小都市では中学校までになっています。その理由は、大都市では大部分の学生が中学校まで行く財政的能力があるわけです。(韓国学生)
- c. 彼は時々おいしい料理を作ってくれます。彼の方が私より料理が上手なのです。多分、私より彼の方が「食べる」ことが好きだというわけでしょう。(フランス人学生)(以上3例とも原文のまま)

実は、「わけだ」の使用にかかわる誤用例は内容がかなり多岐にわたっているので、問題点を「のだ」との関連で把える目的もあって、上の例は同じ性質の誤用例に限定した。すなわち、上の例 a, b, c の下線部分はいずれも「からである」「からです」「からでしょう」と言うべきところを「わけだ」を使ったのである。つまり間違いをおかした学生は、「わけだ」は「からだ」と同じく、理由を示すと理解していたことになる。

2-2 ところで、この「わけだ」の用法については、寺村秀夫氏が数年来研究を進めてこれ、それらは氏の『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』に集大成され、ほぼ解明された感がある。これによると、「わけだ」の用法は次の三つに分けられる。

- (i) ある Q という事実に対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実 P をあげ、そこから推論すれば当然 Q になる、ということを用いた。「……コトニナル」と言いかえができる。

- (ii) P という聞き手に身近な事実をあげ、その事実、ある角度、観点から見ると Q という意味、意義がある、ということ聞き手に気づかせようとする言いかた。「言いかえると……」というぐらいの軽い感じの場合もある。
- (iii) P→Q という推論の過程は示さず、Q ということ、自分はただ主観的にそう言っているのではなく、ある確かな根拠があつての立言なのだということ、言外に言おうとする言いかた。乱用すると独断的な、押しつけ的な印象を与える<sup>(2)</sup>。

『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』には、それぞれに対する豊富な用例がのっているが、煩瑣になるので用法 1 と 2 にあたる例を、1 例ずつあげておく。

1. 信吾は東向きに坐る。その左隣りに、保子は南向きに坐る。信吾の右が修一で、北向きである。菊子は西向きだから、信吾と向い合っているわけだ。(川端康成『山の音』)<sup>(3)</sup>
2. 労働省では、「職員は七月二十日から九月十日までに連続一週間の夏休みをとるように」と大臣のおふれが出たが、その通りに休んだのは若い男子職員や女子職員に多く、局長や課長クラスは、せいぜい連続 2 日程度とか。夏休みに対する考え方にも世代の差が現われているわけだが、(以下略) (日経 1971. 9)<sup>(4)</sup>

上に示されるごとく、「わけだ」を考える際に原因・きっかけとなる P を立て、それによって生ずる結果 (帰結・結論) を Q とし、その P と Q との関係で「わけだ」をとらえようとするのは極めて妥当なことで、あえて異論をはさむ余地はなく、筆者自身この三分類にしたがって教えてもきた。

2-3 ところが、学習者にとって「わけだ」の難しさはもっと別なところにあることが分かってきた。その事を気づかせてくれたのが、先に示した留学生の誤用例である。この場合、学生は「わけだ」を「からだ」と同じものだと錯覚しているのだが、この誤解は決して的外れなものではなく、無理からぬ面がある。次の文章はテレビのシナリオからとったもので、スーパーで万引した主婦 (昌子) を、ガードマン (悦子) が外まで追いかけてつかまえ、喫茶店に連れて行って詰問している場面である。

悦子「何遍もやってんでしょう？」

昌子「ううん。はじめてよ。何遍もだなんて (あまりすれっからしではなく、弱気も十分ある)」

悦子「買えないわけ①？」

昌子「え？」

悦子「お金ないから、とるわけ②?」

(中略)

悦子「どのくらいとった?」

昌子「(目を伏せ) はじめてだって言ったじゃない」

悦子「ずっと見て知ってんのよ。どのくらいとるか、見てたのよ」

昌子「そういうのを見てるわけ②?」

悦子「客商売だからね。万引するお客さんの研究もしてんのよ」

昌子「へえ」

悦子「(テーブルのものを指して) こういうもの欲しかったわけ②?」

昌子「特別そういうわけでもない②けどね」<sup>(5)</sup>

上の例文では、合計5つの「わけ」が用いられているが、文脈から考えると、①と④と⑤の場合、「わけ」に先行する文は理由を表わし、②と③は結論(帰結)を表わす。このことから、「わけだ」を理由を示す表現と解する学習者がいても不思議ではないし、また、前にあげたような誤用例は現実に少なくないのである。では、「わけだ」に先行する文は、どうして時に理由を表わし、時に結果を表わすのか。文脈に応じて理由を表わす時もあれば、結果を表わすこともある、という風に指導すればよいという意見もあるが、それでは学習者を納得させることはできない。これを何か一つの原理で、統一的に説明できないだろうか。そこでもう一度、前出の例文①と②とをくらべて、検討してみる。

① 「買えないわけ?」

② 「お金ないから、とるわけ?」

この二つの文は、実は全く同じことを表わしているのではないだろうか。すなわち、「買えないわけ?」というのは、「買えないから、とるわけ?」の「とる」の部分省略、あるいは言わずに済ませた形であって、②の「お金ないから、とるわけ?」と本質的な違いはないということである。このように考えていくと、「わけ」が示しているのは、それに先行する文が理由であるとか、あるいは結果であるとか、といったことではなく、上の例文に即して言えば、買えない(または、お金がない)、故にとる(あるいは、盗む)という二つの関係(寺村式に P と Q の関係とする)を話し手が「ああ、そうですか」と物事と物事とのつながりを納得する、あるいはそう理解してよいのかと相手に確認するというのではないかと思う。この二つの関係というのは、

典型的には因果関係を表わすことが多いが、その外、同じ物事の表と裏の関係、あるいは対立の関係も考えられるだろう。寺村氏は、PとQの意味的つながりの解明に言葉を多く費やし、先に示したような3つのタイプに分類したのであるが、PとQの意味関係を伝えるだけでは、先に出たような誤用の生ずる原因を説明しきれないのではないだろうか。

- 2-4 以上をまとめると、次のようになる。「わけだ」において最も基本的なことは、PとQとの間に上のような関係があることを話し手が認め、それを納得することである。そして関係を認め、納得することが基本なのだから、PとQのいずれかが言わなくて済む（くり返す必要がない）となれば、Pが消去されてQだけ残り、「Qわけだ」となるか、あるいはQの方が消去されて「Pわけだ」となる。もちろん、どちらも消去されず「P(だ)から、Qわけだ」とか、「Pだ。それで(つまり)、Qわけだ」といった形になる場合も少なくない。それから、冒頭の例に見られるように講演会などでは「わけだ」が連発されることがあり、これは寺村氏の分類の3番目に相当するのであるが、これなどは話し手の側に、自分のしゃべっていることは聞き手も承知の前後関係の中で述べているのであり、ことさら因果関係を述べなくとも納得してもらえるはずだという意識がある場合に生ずる。これをあえて公式化すれば、PとQの未分化型、あるいはPがQに埋没した形とでも名付けることができるだろう。
- 2-5 以上述べてきたことを、学習者に対しては次のような例文と図式で提示したい。

例 1. A「大学の中が静かですね」

B「冬休みに入ったのです」

A「ああ、それで静かなわけですね」

〔冬休みに入ったから、静かな〕わけだ。

(P, Qのうち, Pを欠く)

例 2. B「大学の中が静かでしょう。どうしてだかわかりますか」

A「さて。あ、わかりました。つまり、冬休みに入ったわけですね」

〔冬休みに入ったから、静かな〕わけだ。

(P, Qのうち, Qを欠く)

上の例に即して言えば、「静かなわけです」と「冬休みに入ったわけです」について、前者は結果を、後者は理由を表わすといった表面的な理解にとどまらないように指導しなくてはならない。どちらも基本的には同じことであり（つまり、PとQの関係をあらためて理解し、納得するということ）、文として明示する必要があるか、

ないかの部分で差が出たにすぎないことが分かれば、「わけだ」の構造と意味用法は一元的に理解されることになる。これを図式化すれば、

- ① P を知って,  $P \rightarrow Q$  の関係を納得する場合  $\rightarrow [(P), Q]$  わけだ
- ② Q を知って,  $P \rightarrow Q$  の関係を納得する場合  $\rightarrow [P, (Q)]$  わけだ
- ③ P, Q の関係が話し手の中で未分化, ないしは融合した場合  
 $\rightarrow [-, Q]$  わけだ

となろう。この図式は、P と Q との意味関係の多様さ（基本的には因果関係といってよい）を捨象した、見方によってはかなり荒っぽいものだが、「わけだ」の基本構造が一目瞭然に分かるという意味では、少なくとも教育上の観点からみれば、有効な方法であると思う。

### 3 「のだ」の文をめぐる諸説の検討

前章において、「わけだ」の意味内容と構造を二つの関係（P と Q の関係）の確認、および、どちらかの項の消去という観点から述べてきたが、これと全く同じことが「のだ」の文についても言えるということを、以下において考察する。

「わけだ」の文についての考察は、寺村氏のものを除いてはあまり目ぼしいものはないが、「のだ」の文に関しては、それこそ数え切れないほどの論文が発表され続けている。それらを網羅的に紹介するのは本稿の目的ではないので、それについては、小矢野（1981）、田野村（1986）を参照してもらうとして、ここでは日本語教育でも引用されることの多い幾つかの論文に的を絞り、その共通の問題点を指摘することにする。

**3-1 「のだ」は説明を表わすという言い方が、日本語教育でよくなされる。**前掲の田野村（1986）によれば、大宮貫三の「日語活法」（1907年）で、既に『の』の代表的な機能の一つである「説明」を明確に指定し<sup>(6)</sup>であるとのことであるが、ここでは日本語教育にも強い影響力をもった Alfonso（1971）をあげる。

NO DESU indicates some EXPLANATION, either of what was said or done, or will be said or done, and as such always suggests some context or situation.……

「ちょっと待ってください。話があるんです。」(*Hanashi ga aru n desu*) explains why the other is requested to wait.<sup>(7)</sup>

久野（1973）は、基本的には Alfonso の分析によりつつ、次のように結論づけている。

「ノ德斯」は、話し手が先に言ったこと、したこと、あるいは、話し手の状態（元気がないとか、外出の身仕度をしているとか）に対する話し手の説明を与える。話し手がこれから述べようとすることに對する説明を与えるという用法はない<sup>(8)</sup>。

久野は「ノ德斯」と「カラデス」とを対比させながら論じているが、次の例で前者は「ノ德斯」を「カラデス」に置き換えても、ほぼ同義であるのに対し、後者は極めて不自然になるとしている。しかしながら、久野は「説明が必ずしも原因であるわけではない」として、どちらの場合も「説明」という言葉でもって言い換えを行なっている。

a. 体重が10ポンド減リマシタ。病気ナノ德斯（＝病気ダカラデス）。

「体重が10ポンド減ったことの説明は、病気であることです」

b. 病気デス。体重ガ10ポンド減ッタノ德斯。

「病気であることの説明（証拠）は、体重が減ったことです」<sup>(9)</sup>

久野は、「ノ德斯」と「カラデス」の違いを『「ノ德斯」は説明を、『カラデス』は原因・理由を表わす（原因・理由でない説明もある）」とし、あくまでも「説明」なる言葉で上にあげた例における「のだ」の文 a, b を解釈しようとする。しかしながら、b の場合をも「説明」で言い換えるのは、やはり無理があり（実際、久野自身「証拠」と言い換えざるを得なくなっている）、原因・理由でない場合の「説明」とは何なのか、久野の分析ではあいまいなままである。「説明」という言葉のもつこのようなあいまいさと矛盾とは、後に田中望（1979）や国広哲弥（1984）によって指摘されるのであるが、ここでは、「のだ」に先行する文には対照的な二種のものが存在することが、久野の時点ですでに問題となっていることに注目しておきたい。

3-2 次にかけける山口佳也（1975）における定義は、「説明」などといった言い方を排して、構文的に「のだ」に迫ったものとしてすぐれたものである。言語化されていない部分をあえて言語化することで、学習者に具体的なイメージをつかませるという点で、日本語教育にも応用できる面が多い。

「のだ」の文は、あるいはその文だけで、あるいは先行文と協同して、

××トイウコトハ○○トイウコトダ。

という内容を表わす文であるという点で共通している。……意味についても、指摘された「説明、理由、強調」その他の意味あいには、「××トイウコトハ○○トイウ

コトダ」という「のだ」の文の本来の意味に還元して考えることによって、初めて統一的な説明が可能になると思われる。例えば、

彼はもう抵抗しなかった。諦めたのだ。

では、「説明」ないしは「理由の提出」をしているように見えるが、「彼が抵抗シナイトイウコトハ彼が諦メタトイウコトダ」と言っていると考えられる。また同様に、ある人がドアを開きながら、

お前はもう帰るのだ。

と「命令的」ニュアンスをもって言う場合も、本来の表現としては「自分ガドアヲ開イタトイウコトハオ前ガ帰ル(ベキダ)トイウコトダ」と言っているわけである<sup>(10)</sup>。

**3—3** 上の山口の分析に対しては、田中望(1979)が、次の例をあげて批判を加えている。

(3) 彼はもう抵抗しなかった。諦めたのだ。

(4) 彼は諦めた。もう抵抗しなかったのだ。

(3)' 彼はもう抵抗しなかったトイウコトハ、諦めたトイウコトダ。

(4)' 彼は諦めたトイウコトハ、もう抵抗しなかったトイウコトダ。

山口(1975)の主張するところは、必ずしも(3)'(4)'などの文がそのまま日本語として文法的な文になるということではない。ただ(3)は(3)'と言っていると解釈しようというにすぎない。しかし、そう考えたとしても、(4)と(4)'を同じことを言っていると主張することはできそうにない。(4)は「××トイウコトハ、○○トイウコトダ」にはおさまりきらない関係を含んでいる<sup>(11)</sup>。

田中は、さらに「のだ」の文は、その文を単独に検討しても意味がない。必ず、前提とされる文、あるいは状況との関係で分析していかなければならないとし、「のだ」を含む文を「説明項」、その文によって前提される文あるいは状況を「被説明項」と呼び、それらを「事実文」「判断文」の類別と関連させて文の種類分類を試みている。田中の、この理論的精密化の方向は、日本語教育の立場からするとほとんど実用性に乏しく、これ以上の検討を必要としないが、山口説の問題点を指摘したこと、「のだ」を含む文(=説明項)と被説明項の間には、因果関係に立つものとそうでないものがあることを明確にした点で本稿と関連が出てくる。

**3—4** 次の倉持保男(1982)は、「のだ」の文を極めて対照的な二つの例に集約して示した。一般的な、日本語教師向けの事典にのった定義であるから、意識的に簡略化



された面があるかもしれないが、しかしこれは、久野(1973)、田中(1979)で問題とされつづけてきたことそのものである。

(1) ある結論を導き出すために、その前提となる事柄を述べるのに用いる。

○電車の事故があったんです。それで、遅刻してしまいました。

(2) ある事柄を前提として、それから必然的に導き出される結論を主張するのに用いる。

○台風が近づいているから、天気がぐずづついているのです。

なお、(1)と(2)の用法が同時に用いられることもある。

○君にも権利があるのだから、何も遠慮することはないのだ<sup>(12)</sup>。

すなわち、倉持は「のだ」に前提、あるいは理由が前接する場合と、結論、あるいは結果的なものが前接する場合の二つを「のだ」の用法の典型的なものと考えているようである。しかしながら、どうして二つの対照的なケースが共存するのかについては、倉持も述べていない。

**3-5** 次にかかげるマクグロイン(1984)の「のだ」についての解釈は、これまで紹介してきたものとはかなり異質なものである。一つ言えることは、こうした言いまわしは実体が不明確で、いわば話し手の主観に委ねた形のものであり、少なくとも語学教育には不向きな解釈だということであろう。

「のです」の基本的機能は、談話の状況の中で、ある情報を既知の情報(known information)として提示することにあると思われる。そして、これは、必ずしも話し手がある情報を事実として自分の知識の中に持っているという事ではない。話し手は、「のです」を使うことによって、話し手しか知らない情報をあたかも聞き手も知っているかのように、又、聞き手しか知らない情報を話し手も知っているかのように提示するのである<sup>(13)</sup>。

**3-6** 国広哲弥(1984)は、「のだ」の意味用法についての従来からの諸説を、(A)説明説、(B)客体化説、(C)既知説、(D)既知関連命題説、の四種類に分類し、国広自身は(D)の既知関連命題説の三上章(1953)にもっとも近いとし、それに基づいて他説を検討している。その中で説明説に対して、次のように批判している。

説明というのは、目の前にある事柄が生じた理由を示すことに外ならない。その理由というのは、まさに目の前の事柄と関連のある過去の事柄である。次に、説明

説で説明できない用法を見よう。……

(繁華街をお客を案内しながら言う場面) ここはとてもにぎやかなんです。

(Alfonso, 1966: p. 404 からの用例)

街がにぎやかであることは見れば分るから、現状に対する説明ではありえない<sup>(14)</sup>。

説明というのは理由を示すことだ。だから、説明説では「ここはとてもにぎやかなんです」を説明しきれないという指摘は、Alfonso, 久野以来の、「説明」でもって理由と結果の両方を処理しようとした説明説の矛盾を、明確に突いたものとして重要である。少なくとも今後は、「のだ」を分析するのに、「説明」というあいまいな用語は使うべきではないと筆者は考える。ところで、国広は「のだ」の意義素を次のように定義している。

「のだ」は現況を出発点として、それと何らかの関係のある命題を既成のこととして提示する。既成とは過去の事実とは限らず、未来についての既定の計画でもある。文脈によっては出発点が過去時であることがあるが、そのときは「のだ」はさらに一段前の過去を示す<sup>(15)</sup>。

この国広の定義は、すべての事例が説明できる意義素の確定という立場からなされており、当然、抽象度の高い表現が用いられているため、その意味では国広が厳しく批判したマクグロインの分析結果と同じく、日本語教育の現場では利用しにくいものである。一方、それに対して、これまで見てきたように Alfonso, 久野, 田中, 倉持では、日本語教育でも使える定義をもとめて、「説明」だとか、「前提」だとか、「結論」だとかいった、具体的イメージを喚起しやすい言葉を使っての考察が進められてきたわけである。

3-7 だが、これらの諸説は、そのいずれも「のだ」に直接先行する文、すなわち「のだ」を含む文と「のだ」との意味関係により多くの関心が集中していて、なぜ「のだ」に先行する文が時に理由を示し、時に結果を示すことになるのかについては、説得力のある解答を出していない。確かに、最近の「のだ」の研究では、田中(1979)の言うごとく「『のだ』を含む文はその文一つだけを切り離しては解釈できず、必ず先行する、まれには後行するコンテキストが必要であること、そして、そのコンテキストは、言語化されたものでなくともよく、状況的なコンテキストでもよい」<sup>(16)</sup>ということは常識となっているが、その肝心の「のだ」を含む文と、それに先行する、あるいは後行するコンテキストとの関係の把握が明確には行なわれてこなかったようである。その点、次の寺村秀夫(1984)の表現は、やや一般的すぎる面もあるが、その

二つの関係を的確に示して、筆者の直観とも合致するものである。

先行する文、あるいは状況を P としてとり立て（言語化するかしらないかは別として）それについて説明する（あるいは説明を求める）のが、～ノダの最も一般的な使い方である。(P と Q の)「結びつけ」は、因果関係にはちがいないが、「……から」「……わけ」のように言語化するというほどはっきりした因果関係という意識は少ないと考えられる。P という状況を、Q という状況に結びつけた、P から Q を連想して言った、というぐらいの気持であろう<sup>(17)</sup>。

しかしながら、「わけだ」の時と同じく、寺村は「のだ」に先行する文にも二つの対照的な文が来るという現象に特に触れていないし、また Alfonso の「説明」説以来、そのことが一つの論点になっていることに興味を示さない。寺村は、「わけだ」の場合と同じく、P と Q がどういう意味関係にあるかを指摘することで十分だと考えているようである。

3—8 そろそろ結論に入らなければならないが、ここで時間をさかのぼって三上章(1953)が「のだ」についてどう書いているかを検討してみる。発表順位からみれば真先に論ずべきものであるが、それが最後になったのは、特に意図があつてのことではない。実は、Alfonso の説明説から始まった「のだ」の文をめぐる諸説の検討の過程で、三上に言及している論文にも出会っているのだが、いずれも、筆者の関心には結びつかない形での引用であった。今回、三上を読み直し、あらためてその分析の鋭さと記述のみずみずしさに深く共鳴するところがあった。筆者の考えてきたことと、少なくとも半分以上は重なり合う。何よりも、三上の表現にはその後の諸説のおちいった不必要な抽象化がなく、理論的でありながら、平明かつ具体的である。

三上(1953)は、「何々スル、シタ」を単純時と呼び、「何々スル、シタ+ノデアル、アッタ」を反省時と呼んで対立させるのであるが、その違いを「『何々スル』を既成命題とし、それに話し手の主観的責任の準詞『ノデアル』を添えて提出するというのが反省時の根本的意味であろうと思う。」と、一応定義しつつ、「反省時による解説は文脈の解決をめざすものだから、何らかの場面を前提として使われるものである。つまり前文と関係的に出てくるものであって、……」と言い、さらに「提出された既成命題が、そうして提出されたということで理由や結論らしい役割をつとめて前後を結びつける、といった程度に因果関係をほのめかすものであり、……」<sup>(18)</sup>と述べている。三上はこの部分において、要するに「のだ」の文は关系的であり、「のだ」の文は理由や結論を示す、と明瞭に言い切っているのである。それから、次の観察も特筆に値

する。

ふらんすト較ベテミルトヨク分ル。ふらんすデハ都市デ起ッタガ、日本デハ農民ガ支持シタノdeal。

の「ノdeal」の効力は全文に及んでいると思う。つまり、逆説の前後を交換すると、

「日本デハ農民ガ支持シタ」ノdealガ、ふらんすデハ都市デ起ッタ。

となるのでなく、

「日本デハ農民ガ支持シタガ、ふらんすデハ都市デ起ッタ」ノdeal。

とする方が正しいような準用だと思う。括弧しただけの語句を「ノ」が引くくめているのである<sup>(19)</sup>。

上にあげられた例は、因果関係でなく、対比関係の例であろうが、このように「のだ」の機能を括弧を用いて表示するというやり方は、筆者自身「わけだ」の説明において試みてきたところのものであり、特に日本語教育の現場では、抽象的な語句を駆使しての説明よりも、はるかに分かりやすく効果的であると思う。

以上の検討を通じて分かることは、三上の説というのは、より簡潔な定義を目指しつつも、具体的なイメージを思い浮かべられなくなるほどの抽象化は決して行なわなかった、ということであろう。しかるに、これまでみてきた「のだ」をめぐる三上以後の諸説は、その多くが無理に一つの言葉で定義しようとしたり、あるいは過度な抽象化に走ったりして、かえって「のだ」の理解を困難にさせる結果となり、三上の到達した地点からほとんど前進していない。

#### 4 「のだ」の文の構造

前章において、筆者は「のだ」の文について、いくつかの説を紹介しながら、その問題点を述べてきた。その結果、「のだ」の文が「わけだ」の文と全く同じ問題を提示していること、つまりは「のだ」と「わけだ」は構造的に同一であることが明らかになったと思う。

すなわち、「のだ」は、ある事柄 P とある事柄 Q との間に話し手が何らかの関係を認め、そしてそれを話し手の責任において主張する時に用いられるのである。何らかの関係というのは、因果関係を主として、時に表と裏の関係、あるいは対比なども

含む。「わけだ」との違いは、「わけだ」の場合には、言われてその関係を納得するというので、その関係の認定を聞き手、ないしは不特定多数に委ねる、あるいはそれらと共有するという感じが濃厚なのに対して、「のだ」の場合は、その関係の認定を、話し手が自己の判断と責任において行なうという意味合いが強くなる。しかしながら、この二つはそれほど離れているわけではない。次の例は、書き言葉における「わけだ」「のだ」の例であるが、両者の違いはきわめて小さい。

……たとえば、「妹のセーター」というくみあわせは、セーターのもちぬしが妹であるという関係にもとづいているのだが、このくみあわせで、かざりの「妹」をより一般化してしまって、「女のセーター」としたらどうだろうか。……「妹のセーター」というくみあわせのなかでしめされる「妹の」は「セーター」のもちぬしを指定しているわけだが、妹がもっているセーターであるからには、妹がもつにふさわしいセーターだろうし、そういう意味では、間接的には、セーターの質を規定しているといえる<sup>(20)</sup>。

それからもう一つの違いは、「のだ」の方が因果関係の結びつきが希薄になっていて（寺村に述べられているように）、P と Q のどちらかが言語化されない率が、より高いという点である。

しかしながら、これらの違いにもかかわらず、「のだ」と「わけだ」の共通点であり、かつ最も重要と思われることは、ある事柄 P とある事柄 Q のどちらが言語化され、どちらが言語化されない（あるいは言わずに済ませられる、あるいは消去される）かは、話の運びや外的状況に左右されるものであって、たまたま残った項（P、あるいは Q）と直接的なつながりをもつものではないということである。言い換えると、「のだ」と「わけだ」が伝えようとするのは、P と Q の関係認定だけなのだということである。このことが理解できれば、「のだ」を含む文が時に「理由」を表わし、時に「結果」を表わすという、実に分かりにくい現象が一元的に説明できる。また、「のだ」を含む文は「理由」「結果」だけでなく、さまざまなニュアンスを持つが、これも P と Q の関係において因果関係が薄くなった場合に出てくる現象であって、「のだ」自体の中にそうした意味合いが含まれているのではない。そして、さらに、本稿の冒頭の例で示したように、P と Q が未分化のまま「のだ」が連発されていくケースは、「わけだ」の場合と全く同じで、言葉に表わし得ずに、ただ関係のみが話し手の中で意識され、確認された時に成立するのである。

以上のことを、「わけだ」の場合にならって、学習者に対してどう提示するかを、

次の例文と図式でもって示す。

(少し前に出かけて、また戻ってきた A と、うちに残っていた B とのやりとり)

B「あれ、どうしたんですか」

(P, Q のうち, Q がない)

もし学習者にパラフレーズして教えるとするれば、

$\frac{[ \text{どういうことがあって, } \text{もどってきた} ]}{P, Q}$  のですか。

A「お金を忘れたんです」

(P, Q のうち, Q がない)

[お金を忘れたので, もどってきた] のです。

B「あ、それで、もどってきたのですか」

(P, Q のうち, P がない)

[お金を忘れたので, もどってきた] のですか。

最後の例は、「それで」が残っているから P が完全に消去されているとは言えないかもしれない。以上を図式化すると、

① P を知って, P, Q の関係を確認・主張する → [(P), Q] のだ

② Q を知って, P, Q の関係を確認・主張する → [P, (Q)] のだ

③ P, Q の関係確認が話し手の中で未分化, ないしは融合している  
→ [-, Q] のだ

以上の図式化で、学習者は「わけだ」の場合と同じく、「のだ」を含む文が理由であり、あるいは逆に結果であり、あるいはそのどちらでもないということの矛盾を、視覚的にも理解し、その後は不思議とも何とも思わなくなるだろう。このことが分かれば、2章の誤用例で紹介したような「わけだ」=「からだ」と誤解してのあやまりは減ってくるだろうし、また同じく「のだ」=「からだ」と混同することもなくなるだろう。久野(1973)は、「のだ」と「からだ」を並べ、置き換えられる時とそうでない時を論じているが、そもそも、この二つは構造を全く異にするものであり、久野のように類義語的扱いをしては、かえって混乱を助長するだけである。例えば、次の文章をみよう。

一八二四年の英蘭協定で、植民地の分割が確定したから、イギリス東インド会社の官僚たちは、ほっとしたにちがいない。しかし、内陸部の開発が、政府や国策会

社の手によってすぐさま始まったわけではない。

この年から一八七四年のパンコール協定までが、内政不干渉の時代である。植民地官僚が介入を渋ったのは、利益に較べて危険が大きかったからだ。

マラヤで態度をはっきりさせなかったこの世紀の半ばに、英国は中国でアヘン戦争の対決に応じている。大陸の利益は戦争に値するほど大きかったのだ<sup>(21)</sup>。

下線をほどこした部分はどちらも理由を表わしている。しかし、相互の入れ換えは不可能である。その理由は、「大きかったのだ」が「[大きかったから、……応じている]のだ」を意味しているのに対して、「大きかったからだ」は、理由しか表わさない文であるから、次に結果を表わす文が来るか、あるいは例文のように、「～(の)は～からだ」という構文をとらない限り、完成しないからである。

このように、「のだ」「わけだ」の基本的構造さえわかれば、「のだ」「わけだ」に関して従来から指摘されている特徴的な現象も分かりやすくなるはずである。例えば、山口(1975)に「(「のだ」の文の場合に)『結局、要するに、つまり、一言でいえば、換言すれば、言いかえれば、簡単にいえば、手取り早く言えば』などの語句が冠せられることがしばしばある。」<sup>(22)</sup>と述べられているが、これは「のだ」の文に限られるわけではなく、「わけだ」の文についても言えることである。すなわち、P、Qの関係にあって既に前に言われているためくり返す必要のなくなったQ、あるいはPの部分代行し、P、Qの関係の存在をより明確に伝えるのが、これらの語句の役割なのである。次の例でもそれが分かる。

- 1) イタリアの半島では海ぞいに走る山脈は内部の山脈よりもはるかに禿げており、また一定の高さ(ほぼ三四百メートルであろうか)より上は必ず岩山になってしまう。だから一般に海岸は貿易港としてしか開けない。言いかえれば海岸は交通路に面しているという以外に特に海から恵まれるところがないのである<sup>(23)</sup>。
- 2) 金田君は堂々たる実業家であるから固より熊坂長範の様に五尺三寸を振り廻す気遣いはあるまいが、承る処によれば人を人と思わぬ病気があるそうである。人を人と思わぬ位なら猫を猫とも思うまい。して見れば猫たるものは如何なる盛徳の猫でも彼の邸内で決して油断は出来ぬ訳である<sup>(24)</sup>。

以上をもって「のだ」「わけだ」の考察を終える。本稿は「のだ」「わけだ」の基本的構造の解明を主な目的としたので、個々の具体的なあらわれ方に関する検討が不十分であった。それについては、他日を期したい。

本稿は1986年12月17日に一橋大学語学研究室12月例会で報告したもの、および1987年3月のローマ日本文化会館日本語教師研修会、ならびにドイツ・ケルンの日本文化会館日本語教育シンポジウムにおいて行なった発表がもとになっている。なお、ローマの研修会においてはヴェネツィア大学の久保田洋子氏、ケルンのシンポジウムでは文化会館の佐藤之敏氏から貴重な資料と御意見を賜った。記して感謝の意を表したい。(1987. 5. 12)

## 注

1. 星野芳郎「現代技術文明の行方」『NHK文化講演会5』（1981）より引用。
2. 寺村（1984），p. 285.
3. 同 上 p. 274.
4. 同 上 p. 280.
5. 山田太一「路面電車」『山田太一シナリオ作品集②』（1984）より引用。
6. 田野村（1986），p. 88.
7. Alfonso（1971），p. 405.
8. 久野（1973），p. 148.
9. 同 上 p. 144.
10. 山口（1975），p. 228—233.
11. 田中（1979），p. 52.
12. 倉持（1982），p. 389.
13. マクグロイン（1984），p. 255.
14. 国広（1984），p. 6.
15. 同 上 pp. 8—9.
16. 田中（1979），p. 52.
17. 寺村（1984），pp. 309—310.
18. 三上（1953），pp. 239—242.
19. 同 上 p. 246.
20. 鈴木康之「『名詞の——名詞』というとき」『国文学解釈と鑑賞』昭和62年2月号より引用。
21. 鶴見良行『マラッカ物語』（1981）より引用。
22. 山口（1975），p. 229.
23. 和辻哲郎『風土』（1935）より引用。
24. 夏目漱石『吾輩は猫である』（1905）より引用。



## 参考文献

- Alfonso, Anthony (1971), *Japanese Language Patterns*. Sophia Univ. Press.
- 片村恒雄 (1981), 「『のである』と『からである』—小説における理由表現をめぐって」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院。
- 国広哲弥 (1984), 「『のだ』の意義素覚え書」『東京大学言語学論集 84』東京大学文学部言語学研究室。
- 久野 暉 (1973), 『日本文法研究』大修館書店。
- Kubota, Yoko (1985), *Grammatica Della Lingua Giapponese Moderna*. Universita degli Studi di Venezia. Quaderni del Seminario di Nipponistica.
- 倉持保男 (1982), 「のだ (のです)」『日本語教育事典』大修館書店。
- \_\_\_\_\_ (1980), 「のだ」『教師用日本語教育ハンドブック: 文法Ⅱ—助動詞を中心にして』国際交流基金。
- 小矢野哲夫 (1981), 「『のだ』をめぐる諸問題」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院。
- 佐治圭三 (1972), 「『ことだ』と『のだ』—形式名詞と準体助詞— (その二)」『日本語・日本文化』第3号, 大阪外国語大学研究留学生別科。
- 田中章夫 (1964), 「～するわけだ・～することだ」『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院。
- 田中 望 (1979)「日常言語における『説明』について」『日本語と日本語教育』第8号, 慶応義塾大学。
- 田野村忠温 (1986), 「命題指定の『の』の用法と機能—諸説の検討」『言語研究』第5号, 京都大学言語研究会。
- 寺村秀夫 (1979), 「ムードの形式と否定」『英語と日本語と』くろしお出版。
- \_\_\_\_\_ (1980), 「ムードの形式と意味 (2) —事態説明の表現—」『文芸言語研究言語篇』5, 筑波大学文芸言語学系。
- \_\_\_\_\_ (1984), 『日本語のシンタクスと意味』第2巻, くろしお出版。
- 林大 (1964), 「ダとナノダ」『講座現代語6 口語文法の問題点』明治書院。
- マクグロイン・H・直美 (1984)「談話・文章における『のです』の機能」『月刊言語』1984. 1月号。
- 三上 章 (1953), 『現代語法序説—シンタクスの試み』くろしお出版 (1972年復刊版)。
- 山口佳也 (1975), 「『のだ』の文について」『国文学研究』第56号, 早稲田大学 (『論集日本語研究7 助動詞』(1979, 有精堂)に再録)。